

## 住まいと健康フォーラム ニュース

発行者：住まいと健康フォーラム事務局  
〒108 東京都港区白金台4-6-1 国立公衆衛生院 建築衛生学部  
☎ 03-3441-7111 内277 FAX 03-3446-4314

第3号  
'94.12.15

### トピック

## 今年の虫騒動・ダニ騒動

吉川 翠(東京都立衛生研究所)

今年は百年に一度の暑さとか、夏の平均気温の高さは史上二番目とか言われ、東京都内は7月中旬頃から暑くなり始め、連日35℃はあたりまえという状態でした。

この暑さのために、あちらこちらで異常現象が発生しましたが、虫やダニの世界でも同様に異常現象が見られました。虫に関しては、家屋内に入り込んでくるアリ類の苦情が続出したり(6~8月)、ハチが家屋周辺に多数出現し、神奈川県や東京都下は勿論のこと、23区内でもハチ対策費が7月頃から残り少なくなり始めたり、ネコノミは近所の人同士でケンカになる程の被害を起こしたりと、高い気温による影響はかなりのものでした。

ところが、ダニに関しては、あまり一般家屋では問題にならなかったようです。理由は雨が少なく空気が乾燥した上に、気温が高かったので、乾燥状態に余計拍車をかけたからでしょう。

しかし、湿度の高い場所、例えば新築コンクリート住宅内や、ビニール袋に入れて倉庫等にしまわれていたワラ製品、布製品類には、ミナミツメダニの異常発生がみられました。

湿度が十分整っていた一部の場所にのみダニの異常発生がみられたという奇妙な現象でしたが、苦情件数からみれば例年並の数でした。

### フォーラム鳥取報告

1994年10月13日から15日まで、鳥取市で公衆衛生学会が開催されました。

この時、13日午後6時より、「住まいと健康」をテーマに、自由集会在開催されました。

最初に、事務局である国立公衆衛生院の松本住宅衛生室長から「住まいと健康フォーラム」の設立経過と入会の案内がなされました。その後は参加者が一人一人「住まいと健康」をめぐる意見を述べました。30名を超える参加者が、熱心に意見交換を行いました。予定時間を超過してしまい、その後も場所を変えて話は続けました。

ここでは、当日報告をいただいた京都市の保健婦、飯降さんのお話をはじめ、意見や報告から、ピックアップして紹介します。

#### ◆京都市宇治保健所 保健婦 飯降 聖子

今回の公衆衛生学会で、住宅改善に保健婦として携わった事例を発表しています。

発表の内容は、高齢者や難病の患者さんの日常生活に支障がある住宅を見せてもらい、問題点をチェックし改善のアドバイスをした28例の内、実際に工務店に住宅改善の施工を行ってもらった5例の結果をまとめたものです。

今までの保健婦の家庭訪問では、家のすみずみまで見るということは、少なかったのですが、実際に困っている事についてアドバイスするため家の中を見せてもらいました。各場所を計測し、見取り図を書き、どこで、どのようなことに困っているかをつきとめ、改善に結びつけていくため、工務店やネットワークの力を借りて、改善施工を行いました。

最終的には福祉の住宅改造助成金を活用する形で改善を実施しました。

保健婦は家族や患者さんの希望に沿った提案ができる立場にいると思います。コーディネーターと言うとおおげさですが、調整役として機能できると思います。

また、患者さんや介護する家族の方から「住宅改造が役に立った。できなかったことができるようになった。」と言う声が、保健婦の意欲につながっています。

大規模な住宅改善ばかりでなく、歩行用のワゴンを改造するという小さな改造でも非常に便利になる例もあり、改めて工夫や改善の大切さがわかります。

◆東京都港区麻布保健所 環境衛生監視員 五味 武人

住宅を始め、建築物は衛生的で管理の容易なものでなければなりません。そのために建築される際に、給水設備等について図面の段階の指導を行っています。指導の際には、現場の写真をもとにした、視覚的に分かりやすいパンフレットを作成し活用しています。

◆公衆衛生院 住宅衛生室 鈴木 晃

先日、東京において住宅改善の支援についてのシンポジウムを行いました。その時パネラーの建築家の方から「建築家は住まいについて限られた一つの断面でしか支援できない。高齢者の住宅改善で重要なことは、生活の継続性つまりニーズの発見とフォローアップをどうするかであろう。その点で最も重要なポイントにいるのは保健婦だろう。」という発言があったことを報告しておきます。

◆横浜市衛生局 環境衛生監視員 西岡 進

横浜市ではマンションなどの給水施設について、構造設備と維持管理状況が良好な施設に、適合マークを発行する事業を開始しました。本事業を通じて、給水施設の衛生管理が一層進むことを期待しています。

◆川崎市幸保健所長 医師 野田 晴彦

住まいの問題について、保健婦と環境衛生監視員が協力して行う事業を拡大して行きたいとします。住まいの問題については、どの職種においても小さいことをつつきたがる傾向があるように感じます。むしろ他の人が何をやっているのかに関心を持つことが重要だと思います。

◆熊本県健康センター 保健婦 福本 久美子

市町村の住宅改善を調査したが、あまり事例があがりませんでした。助成制度が不十分です。しかし金額的には少なくとも、助成制度はあるべきで、その助成による住宅改造が効果をあげることが、助言する保健婦の励みになっています。

建築の担当者と一緒に研修することも検討に上がっています。

◆岡山県立大学 保健福祉学部 岸 敬子

病気や高齢者にならなければ騒がれないのはおかしいと思います。病人だけを扱うのではなく人間そのものを見て行く姿勢が大切で、人がいつになっても使いやすい住宅を考えて行く必要があります。

◆岡山県立大学 デザイン学部 中西 勝彦

建物の基準が健常者のみが基準になっているのですが、例えば車椅子の人にも優しいハードとソフトを備えた建物について消防のマル適マークのような、シルバーマークのようなものができればいいと考えています。

また、住み慣れた町並みを積極的に保存するような、価値観の転換もこの会合で進めて行けるのではないかと期待しています。

◆信州大学 教育学部 入江 建久

現在、教育学部で家庭科の先生になる人を教えているわけですが、どうも細かいことが多くて、住宅そのものの持つ意味を教えるようになっていません。最初は家の中の段差・階段の問題だが、そこから、道路や町の問題につながれば、都市問題ひいては地球に優しい生き方にむすびついてきます。

住宅を考える人達が仲良くしていくこと、時間はかかるかもしれないが、心を通じ合わせていくことが大切だと思います。

その他に、福祉の助成金の額、助成金の申請、東京都の住宅診断事業、福祉部門との連携、住宅改善についての保健婦・作業療法士・理学療法士・建築家・工務店・ケースワーカーらのネットワーク、保健婦の訪問指導等、さまざまな意見や実際の取り組みの報告が出されました。最後に再度このような会で、意見交換できることを期待するという松本先生の言葉で「フォーラム鳥取」は締めくくられました。

すべての方の意見・報告を掲載できなかったこと、また発言要旨を正確にお伝えできなかったこと等につきましては、ご了承をいただくようお願い致します。 (文責:港区麻布保健所 五味)

今年の公衆衛生学会では、保健所の組織やあり方、職種の連携等の話題も活発にでたようです。やはり公衆衛生学会で発表を行った、東京都の木原さんの報告です。内容の詳細は、学会誌をご覧ください。

## 居住環境の実態調査

木原 真隆(東京都食品環境指導センター建築物衛生課)

東京都では、「健康・快適居住環境の確保対策」の一環として居住環境の実態調査を行っています。去る10月15日、私達は、鳥取県において開催された公衆衛生学会で、居住環境の実態調査から一つの提案をしました。

元来、日本の住宅は、高温多湿の夏をいかに快適に過ごすかを追求したことで、風通しが良く、熱のこもりにくいものでした。

ところが、近年の住宅は、建築資材の近代化、生活習慣の変化、経済的な発展などからアルミサッシや新建材が多く使われるようになり、高气密で、断熱効果の非常に高いものとなっています。また、集合住宅は、戸建て住宅に比べさらに気密化・断熱化が顕著なようです。

さらに近頃は、住宅にエアコンが普及し、暖房も電化していますが、まだまだ、石油ファンヒータ等の開放型燃焼器具を利用している家庭も少なくありません。特に、冬の寒さがそれほどきびしくない東京では、手軽で場所をとらないことでよく使用されているようです。

そこで、私達は急速な都市化や住宅構造の変化の中で発生する都民生活の問題点として、どのようなものがあるかを検証するため、一般家庭を対象としたアンケートと住宅の実態調査を実施しました。

様々な問題点が提起された中で、対処方法が判らないものや曖昧なものについて、だれもが簡単に実施できる方法を見つけ出すため、いくつかの住宅で実験を行いました。その一つが、今回提案した「換気」の方法についてです。

石油ファンヒータに代表される開放型燃焼器具を使用した場合、二酸化炭素と窒素酸化物の発生が顕著なことがわかり、これらを排除する方法として最も有効で簡便な「換気」に注目しました。

その結果、“対面する2か所の窓を45センチ、2～3分間開放する”ことにより室内温度を比較的下げることなく、有効に換気できることが測定されました。ただ、この調査では風の強さや風向の影響は、考慮していないので比較的穏やかな冬の日中での結果とお考えください。

私達は、行政として都民に対し、常にどんなサービスを提供できるかを考えています。今回の提案は、小さなごく当たり前の内容かもしれませんが、なんらかのアドバイスとなれば幸いです。

「健康・快適居住環境の確保対策」は、平成8年度に具体的な施策として展開していく予定となっています。

## 健康リビングをめぐる

いわゆる「健康リビング政策」を具体的な事業として進めて行くことについては、各自治体とも手探りの段階であるようです。愛知県の加藤さんより、その取り組みの一つとして、シンポジウムの報告をいただきましたので、以下に掲載します。

## 愛知県の健康リビングシンポジウムについて

加藤廣人（愛知県衛生部環境衛生課）

「お母さん、詳しいんだなあ。でも、ダニに喰われるのと、アレルギーとどう違うんだ？俺はダニに喰われた覚えはないけれどなあ」

「そう言われると困ってしまうけれど。でもダニでぜん息がひどくなる人がいると聞いたことがあるんだから」

愛知県が主催する健康リビングシンポジウムで行った、パネルディスカッションの合間に入れたコントの一コマである。

健康リビングシンポジウムは、今回が3回目である。過去2回は、現在の「住まい」にどのような問題があるのか。「空気汚染の問題」「ダニ・カビ・結露の問題」「安全性の問題」。これら「住まいと健康」に関する全般的な問題提起を行ってきた。

住まいは健康的で安全な場所であるべきところ。しかしながら、現在の「住まい」は「住み方」を少し工夫しないと色々な問題が起こりやすいということを広く問題提起してきた。だが多くのことを知ってもらいたいと、盛り沢山のテーマを短い時間のなかでやりくりしたため、ややまとまりに欠ける感があった。

そこで今回は、問題のある程度絞り「ダニとアレルギー」をテーマにパネルディスカッションを行った。

当日は、晴天。定員900名弱の会場にどれだけの人が参加してくれるのか。朝早くから舞台や受付の設営をし、音響設備やスライド映写機の調子を見て、照明のリハーサルをする。これらはすべて、「居住環境検討ワーキンググループ」のメンバーである環境衛生監視員が中心となって行った。当日のすべての運営はもちろんのこと、コントのシナリオ等もメンバーの手作りである。

午後1時30分、開演。客席の半分以上は埋まった。

最初は、「動物と住まい」と題して鳥羽水族館の中村幸昭館長による特別講演。

次いで、名古屋大学の宮尾克助教授をコーディネータとしたパネルディスカッションが今まさに始まろうとしているところに、相談者と称して若い2名の乱入者が舞台に現れる。コントの第1幕である。相談の内容は共働きの若夫婦の妻だけがダニ？の刺咬被害にあうというもの。

コントの後、日本環境衛生センターの田中生男環境生物部長からダニとはどんな虫か、大きさや種類の多さ、主な生息場所の説明がされた。動物の血を吸うイエダニやワクモなどは、ヒトの血を吸うが病気の媒介はせず、露出していない皮膚のやわらかい部分を刺すこと。ダニや昆虫をエサにしているツメダニ類やシラミダニは、たまたま人を刺すことはあるがそれは積極的に刺しているわけではなく、被害は露出している部分が多いこと。そしてチリダニ類は、アレルギー性のぜん息や皮膚炎を起こすが、アレルギー体質の人だけが問題となり、そういう素因を持っていない人には全く害がないこと、また糞が一番問題となり、体のかけらや脱け殻も問題となることの説明があった。

そして最後に、ダニの言い分として、ダニという名前だけで悪者としなくてほしい。人の役に立っている種類もあり、皮膚に発疹ができたとしても、蕁麻疹とかの皮膚疾患や他の虫によるものもあること。あまり仲間が住みやすいような環境にしないようにすること等が話された。

次いで、椋山女学園大学の犬野秀夫教授から、現在の日本の住宅は暖冷房の効果や騒音防止の観点から建物が閉鎖的になり、加えて省エネルギー対策が拍車をかけて高气密・高断熱の構造へと変化し、さらに、近隣無関心生活が大掃除の習慣をなくし、お互いの家を閉め切る方向

へ進んでいることが今日の課題だということ、また現在、建築サイドの立場からは、環境共生住宅といって自然と触れ合いをもち、開放型の建物にしてその風土にあう建物にすれば、閉め切った生活はしなくてもよいのではないかという方向に話が向かっていることや、床暖房の効果等について説明があった。

次いで、ダニの予防と駆除について、愛知県ペストコントロール協会の川瀬充理事から、温度・湿度・エサの面から、畳乾燥、除湿器や布団乾燥機の使用、掃除機での清掃や布団の丸洗いの効果のこと、また薬剤の効果としてイエダニやツメダニには一般の殺虫剤で対処が可能であるが、チリダニ類には、あまり効果が期待できず、それは畳や布団の内部までは効果が及ばないで、むしろ薬剤の効果が切れた後に畳などに水分を与える結果となってしまうことがあること、駆除することよりもまず予防することを考えてほしいということなどの説明をうけた。

この後コントの第2幕。内容は、子供がどうもアトピー性皮膚炎とぜん息になりかかっているのではないかと心配する夫婦の会話。会話の中にはスギ花粉症から、そばアレルギーまで出てきてしまって、アレルギーに振り回されている様子を演じてもらった。

このコントを受けて、国立療養所中部病院の上田雅乃小児科医長から、抗原と抗体との関係個人の素因の問題、化学伝達物質などのアレルギーの基礎知識で、ぜん息児の80~90%がチリダニに対する抗体を持っており、ぜん息児はチリダニと強い関わりを持っていること、アトピー性皮膚炎児の場合は、パッチテストでチリダニに対して60~70%が陽性であり、ぜん息ほどではないが大きな関わりを持っていること、食べ物のアレルギーは加齢と共に反応する者が少なくなるが、チリダニは3~5歳にかけて陽性に反応する者が急に増えてくること、布張りのソファーやぬいぐるみにダニアレルギーが非常に多いことなどの説明があった。

次に、愛知県江南保健所の環境衛生監視員である渡邊良子専門員が、保健所への相談内容について、アレルギーと住環境とを結びつけて考える母親がまだ少ないと思われることや、アトピー性皮膚炎の幼児を持つ母親に対して小児ぜん息の予防の立場からも住環境の指導を行っている例、高密度シーツやベットの利用、寝具類への掃除機による清掃の重要性などを説明するとともに、室外と室内の湿度とを感知して自動的に回ったり、止まったりする換気扇、名付けて「留守宅用換気扇」、できれば居間にも取り付けられるファッションナブルなものの提案や簀子がすでに組み込まれている押入れなどの設備面での提案を行った。

その後、パネリスト間での討議を行い、最後にコーディネータの宮尾助教授が「毎日を健康に暮らすということは非常に大切なことであり、現在の住居環境のなかで健康に暮らすためには、今では工夫と努力が必要となったといえる。そのために、住み手である我々全員が健康リビングに常に関心を持ち『賢い住み手』になることはもちろんであるが、造り手の方々にも利便性のみならず、家族全員が健康で安心して暮らせる住まいづくりの工夫を考えてもらう契機に、本シンポジウムがなれば幸いである」と結ばれた。

予定どおり午後4時30分に終了。出口で本シンポジウムに関するアンケート用紙を回収して会場の照明を消した。午後6時から会場を移してワーキンググループのメンバーを中心に反省会。パネリストの発言は、それぞれの立場から一般の人にも分かりやすいように配慮されており、参加者は今回のテーマ全体を把握することができたと感じた。また、コントを取り入れたことにより変化を持たせることができ、興味を持ってパネルディスカッションを聞くことができたと思う。しかし、主婦を対象としてのパネルディスカッションであったために、内容がごく基本的なものとなり、専門的なものを求めて参加した人にはやや物足りなかったと思われ

ること。コントを演じてもらった若者と、参加者との間に世代のギャップがあってコントが浮いてしまったことなどが話題としてあがった。

アンケートにも、実際にアレルギー疾患の子供を持つ母親等からはもう少し内容的に突っ込んだ話が聞きたかったとか、会場から具体的な質問をさせてもらいたかったとかの記載、あるいはコントの企画は良かったがはしゃぎ過ぎではないかとの記載もあった。

健康と住まいとは、強い関連があることをできるだけ多くの人に知ってもらおうと始めた事業。今回は地元のテレビ局がパネルディスカッションの内容を撮影し、その日の午後6時30分から5分ほどダニの予防方法を加えながら放映してくれた。シンポジウムの参加者や放送を見た人に、基本的なことは伝わったと思う、保健所には環境衛生監視員がいて「住まいと健康」に関する相談を受けていることも伝わった。

今後、シンポジウムをさらに多くの人に知ってもらうにはどうしたらよいか。どのようなテーマで継続していくのか。さらには「住まいと健康」に関する事業をどのように展開させていくかが、ワーキンググループのメンバーの宿題である。

## お知らせ

本フォーラムの運営、フォーラムニュースの発行・送付にかかる費用は現在、会員の寄付等でまかなっております。フォーラムの維持のため、皆様のご協力をお願い致します。

郵便口座は以下のとおりですので、よろしくお願い致します。

口座番号：00180-4-576848

加入者名：住まいと健康フォーラム

発信者欄に、お名前・ご住所・電話番号をお書きください。

フォーラムは既に全国で約200名程の会員となっておりますが、ネットワークを充実させるためにも、現会員の方々には、各地域での新規会員のお誘いをお願い致します。

「フォーラムニュース」は、皆さんの情報交換の場です。こんな調査をした、こんなことを事業化できた、こんな制度を新設した、他方面の職種と連携している、等々どのようなことでも結構ですから、事務局にFAX等でご連絡ください。（誌上匿名を希望される方は、その旨お申し出ください。）

特に次の内容の情報をお持ちの方は、ご連絡をお待ちしています。

- ・いろいろな職種が集まって、「住まい」に関する勉強会を行っている方。
- ・他方面の職種の連携によって、「住まいと健康」に関する施策を実際に展開している自治体の方

次号の「フォーラムニュース」は、横浜市の保健所における職種間の連携の事例、住まいと健康に関する自主研究グループの活動報告「第2回」などの掲載を予定しています。

### 事務局

〒108 東京都港区白金台4-6-1

国立公衆衛生院 建築衛生学部 住宅衛生室 松本恭治 鈴木晃

電話 03-3441-7111 内線277

FAX 03-3446-4314